軍神の許嫁
虐げられた姫巫女は運命の愛を知る

沖田弥子 Yako Okita

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

第一章　花嫁選び

桧扇の飾紐が、さらりと躍る。

少女が舞うたびに、煌めく星のごとき輝きが散った。

『無』と名づけられた娘は黒い仮面をつけていた。異様な仮面と粗末な着物にもかかわらず、巫女たる者のみがまとう厳かな雰囲気が漂う。

それもそのはずで、無は巫女一族のひとつである和倉家の娘だった。

日本皇国には遥か昔から、あやかしと呼ばれる異形の種族が跋扈していた。人間を襲うあやかしに対抗するべく、退魔師による軍部が編成され、戦いが繰り広げられた。

そうして日本皇国を守る要となった軍部では、退魔師の四神一族が圧倒的な権力を有している。舞をもって彼らを援護する役目の巫女が重宝されてきたため、巫女の一族もまた繁栄を極めた。

四神一族に並び立つ地位を持った最高峰の巫女は『姫巫女』と呼ばれ、崇められた。
それは伝説のような話で、無には無縁のものだけれど。
静謐な山間に、舞による加護を受ける者はいない。
ただ木々に止まっている鳥たちが、黙々と舞う無を眺めているだけ。
そのとき、静かな湖畔を乱す雑音が響いた。
「無！　なにをしているの！」
はっとした無は動きを止める。
鳥たちはいっせいに飛び立った。
振り向くと、姉の美緒子が恐い顔をして立っていた。
「もう朝食を作る時間なのよ。お母様が呼んでるわ。どうしてあたしがわざわざ来なきゃいけないのよ」
「すみませんでした、お姉様」
素早く扇を閉じた無は、それを懐に入れる。
舞に夢中になり、時間を忘れてしまった。食事を作るのは無の役目である。
さっさと家へ向かう美緒子のあとを追い、無は山間の道を急いだ。
走ったため仮面が外れそうになったので、後ろで結んでいる紐を確認する。この黒い

仮面を外したら折檻されるからだ。
朝陽が眩く射し込んでいる道のりを行くと、和倉家の主屋に辿り着く。
主屋の瓦屋根はところどころが剥がれ、壁は色褪せていた。
かつては栄華を極めた和倉家であったが、それも昔の話。
稀代の巫女として名を馳せた母が病気で亡くなると、父は後妻を迎えた。そうして継母となったカノエには、無よりもひとつ年上の娘がいた。それが姉となった美緒子である。
父が再婚したのは、無が五歳のときなので、記憶はおぼろげだ。
だが、それまでは幸せに暮らしていたはずが、継母と姉が和倉家にやってきてからは状況が一変する。
継母のカノエは、美緒子こそ最高位の姫巫女になる資格があると言い張り、自分の娘だけを可愛がった。そんなカノエに父は忠告していたが、その頃から体調を崩し、病床に伏せってしまった。
やがて父が亡くなると、カノエは本性を現す。
和倉家の女主人として横暴に振る舞い、使用人は次々にやめていった。しかも着物や宝飾品などで散財したため、みるみるうちに家計は傾いた。
無には両親が名づけてくれた本当の名前があったはずだが、それを奪われ、離れの小

屋に住まわされた。さらに黒い仮面をつけることを強要される。
今では主屋の掃除や洗濯、炊事などの家事をさせられる日々だった。
無はすでに十九歳になっていたが、年頃の娘らしい楽しみは知らない。友人すらいなかった。名前もなく、財産もなく、習い事もしていない上、不気味な仮面をつけている無に近づく人はいない。
無は、無価値という意味だ。なにもないということでもある。
無価値なのに、恩情で食べさせてやっているというのが、カノエの言い分だった。
和倉家は小さな村にあるため、無の扱いは村人の誰もが知っている。
けれど助けてくれる人はいない。
それは、無が仮面をつけることになった理由にもつながっていた。
——気味の悪い、呪われた娘。
そうカノエに言われ続けてきた。
意地悪な美緒子も母親に追随して、無をいじめてきた。
無には将来なんてなく、なにも希望がない。
母のような稀代の巫女になるなど、夢のまた夢だった。
もちろん舞の稽古をするための師範にはついていないし、練習させてもらえる環境も

ない。
だから誰もいない湖畔で踊っているだけだ。
そうしていると、悲しいことを忘れられる気がしたから。
舞うことだけが無の、たったひとつのよりどころだった。
「遅くなって申し訳ありません！」
裏口から入り、台所の戸を開けた無は頭を下げる。
わずかに屋敷に残っている使用人たちは、すでに調理を始めていた。彼女たちはこちらを振り向きもしない。無価値な無は、いないものとされているからだ。
だが、カノエは苛立った顔をして台所と部屋を隔てた戸口に立っていた。彼女はいつもこうして、使用人たちが怠慢でないか見張っているのである。
「この愚図！　本当になんの役にも立たないわね」
叱責されて、無は首を竦めた。遅れてしまった無が悪いのだ。
怒ったカノエは延々と無が傷つくことを述べる。
無価値だ、呪われている、死ねばいい、いなくていい……
いつものことなので、無は心を閉ざして耐えた。なにも感じないようにすれば、これ以上は傷つかないから。

やがて気が済んだらしいカノエは、上等な着物を翻す。
「さっさと支度しなさい。朝食が遅れたら、ただじゃすまないわよ」
「はい、奥様」
カノエを『お義母様』と呼ぶことは許されていない。
慌てて台所に入った無は、使用人に混じって朝食を作り始める。
野菜や肉を調理するだけではなく、かまどを管理したり、裏の井戸から水を汲んだりと、やることは無限にあった。
上質の膳に調理したものを用意する。
膳はふたつあり、カノエと美緒子の分だ。
無は主屋で食事をすることは許されていない。いつも残り物をもらい、台所の隅で食べていた。
草履を脱いで、土間から部屋に上がり、完成した膳を運ぶ。
ところが部屋に入った瞬間、さっと足を引っかけられた。
「あっ！」
ガシャンと大きな音を立て、膳がひっくり返る。
無は強かに体を打ちつけた。

のせていた椀や小鉢からこぼれた料理が、無残に畳に散らばる。
呆然としている無に、くすくすと嘲笑が浴びせられる。
「あーあ。なにやってるのよ。これもやっぱり、呪いのせいかしらね」
美緒子は楽しそうな声を出した。
髪につけたリボンを揺らし、緋の着物の袂を軽快に振る。
こういったことは毎日のようにあった。
母親に愛されて恵まれた生活を送っている美緒子なのに、無をいじめることに執心しているのだ。
きゅっと唇を引き結んだ無の表情は見えない。
仮面は目だけが空いていて、ほかのところは隠されている。
わざと足を引っかけたのはわかっているが、口答えは許されない。そんなことをしたら折檻され、食事を抜かれるからだ。
騒ぎを聞きつけたカノエは足音荒くやってきた。
「まったく！　わざとこぼしたのね。おまえはわたくしたちに恨みでもあるの？」
「いえ、奥様、そんなことは……」
「口答えするんじゃありません！　さっさと片付けて、新しい膳を持ってきなさい」

「はい、奥様。申し訳ありませんでした」
急いで謝った無は、散らばった食べ物を手で拾い集める。
せっかく完成したのに、もったいない。無がひとりきりで作ったわけではないので、ほかの使用人たちにも顔向けできなかった。
ぐちゃぐちゃになった食事を膳にすべてのせて、台所へ戻る。
そのとき、フンと美緒子が鼻を鳴らした。
「あたしを使った罰よ」
使ったというのは、先ほど湖畔まで無を呼びに行ったことだろう。
行きたくなかったのならば、それを母親のカノエに言えばよいのではと思うが、美緒子の思考はそうはならない。嫌なことが起こるのはすべて無のせいであり、その責任は無が取るべきなのである。それもカノエが、そのように言い続けてきた結果なので、無は従うしかなかった。
それに、無が呪われているのは確かなのだから――
台所に戻った無は、急いで食事を作り直す。
再び膳を運ぶときは慎重になったが、おかずの一品が気に入らないとカノエに叱責され、作り直しを要求された。なにをやっても怒られる。褒められることは決してない。

そうしてようやく膳を出し終え、継母と姉が食事をしている間、無は台所で待つことになる。後片付けがあるからだ。
使用人が帰ったので、無はひとりで台所にぽつんと佇んだ。
今日は膳をこぼしたためか、余り物がなかった。なにも食べないと、とてもこのあとの仕事をこなせない。無は先ほどこぼしたおかずを手にすると、仮面の隙間から口に押し込んだ。
そこにある、呪いのしるしを疎ましく思いながら。
膳を下げて茶碗や皿などを洗い、台所を片付けたあとは休む間もなく掃除を始める。
主屋の屋敷は昔の栄華の名残でとても広かった。そこを無がひとりで掃除する。
今では使われていない部屋もあるが、カノエはそこも毎日掃除せよと命じた。
廊下を雑巾がけしていると、ガタンと背後で音がする。
はっとして振り向くと、緋の袂が廊下の角に消えた。
水を入れていた桶は倒され、拭きあげたばかりの廊下は水浸しになっていた。
惨状を目にした無は、そっと溜息をつく。
美緒子がわざと倒したのだ。無にもっと苦労をかけるため、仕事を増やすのである。

どうしてこんなに意地悪をされなければならないのか。
無が美緒子にひどいことをしたわけではないのに、嫌がらせを受けるのは理不尽に感じるし、とても悲しかった。
前妻の遺した呪われた娘というのは、そんなにも疎まれる存在なのだろうか。
考えてもどうにもならないので、黙々と水浸しになった廊下を拭く。
ようやく廊下を終えると、次は部屋の掃除だ。はたきをかけ、ほうきで掃いていると、日が高く昇ってきた。
一段落したとき、カノエがやってくる。後ろには美緒子もいたが、彼女は素知らぬ顔をしていた。
「まあ、愚図ね。まだ掃除しているの？　美緒子はお稽古があるのよ。さっさと行きなさい」
「はい、奥様」
美緒子は舞の稽古をしているので、それの荷物持ちをしている。ほかの生徒は荷物を自分で持ってくるのだが、母子は極限まで無をこき使う。そのため手が回らず、無の仕事はいつも深夜にまで及ぶ。
掃除道具を片付けていると、美緒子が母親に言った。

「お母様、無はこっそり舞の練習をしているのよ。だから朝食の支度に遅れたのよ」
「なんですって……？」
ギッと鬼のような目でカノエがこちらを見る。
「まさかおまえ、東極（とうごく）家の花嫁になろうなんて考えてないでしょうね？」
「そんなことは考えていません」
無は咄嗟に返事をする。
東極家とは、退魔師を統べる四神一族のひとつである。
あやかしと戦う退魔師の援護に巫女は必須のため、いつしか優秀な巫女を娶（めと）るのが慣例となっていた。
東極家の現在の家長は、東極一希（いつき）。
軍部の局長で、美丈夫だと有名らしい。そんな人の花嫁に選ばれたなら、巫女としても女性としても、最高に幸せに違いない。
もっとも、無はそれを稽古に来ている巫女候補たちの噂話から聞いただけで、東極一希という人物に会ったことも見たこともない。
うつむいている無に、カノエは怪訝な目を向ける。
「それならいいけれど。東極家の花嫁に選ばれるのは美緒子ですからね。おまえのよう

な者がいたら選考に差し障るわ。決して奉納の儀に姿を現してはいけません」
「はい、わかっています。奥様」
来週、村の神社で巫女候補たちを集めた奉納の儀が行われる。
そこでは巫女神楽が披露され、花嫁を選抜するために東極一希が訪れるらしい。
もし東極家の花嫁に村の娘が選ばれたら、大変な名誉だ。
村のどこへ行っても、最近はその話題でもちきりである。
カノエは美緒子が花嫁になると信じて疑っていない。
だが、無にはなんの関係もなかった。
なぜなら、無は稽古場に通っておらず、巫女候補として登録されていないからだ。花嫁に選ばれるための候補にすらなっていない。無が花嫁になるなんてことは、万にひとつもない。
美緒子が花嫁になろうと、ほかの誰だろうと、無は今後も和倉家の下女のように扱われ、埃まみれになって掃除をこなすだけの毎日しかない。
カノエに見送られて美緒子は豪奢な着物を翻し、先ほどとは違ったリボンを髪につけて屋敷を出た。無は大量の荷物を持って後ろをついていく。
美緒子のリボンについた赤いガラス玉が愉快そうに揺れていた。

「東極様の花嫁に選ばれたら、こんな田舎に住まなくて済むわ。帝都で観劇したり買い物したり……とびっきりの贅沢ができるわね」
美緒子の声は弾んでいる。
最上位の退魔師である東極家の花嫁兼巫女となれば、責任も重大だと思うが、そういったことは考えていないようだ。この村は帝都から遠く離れた田舎にあるためか、強力なあやかしが現れたことがこれまでにないので、退魔師が訪れる機会はほとんどない。村の巫女候補たちにとって、高名な退魔師に選ばれて帝都に行くことは憧れだった。
和倉家は村はずれにあるので、ひたすら山道を下りていく。やがて村の中心地に辿り着いた。
小さな村だが、役場や雑貨屋がある。この村は巫女育成に重きを置いているので、巫女の稽古場と、祭礼を行う神社は立派な建物だった。
その稽古場の敷地へ多数の娘たちが吸い込まれていく。
巫女になるため練習を積んでいる村の娘たちである。
「奉納の儀には東極一希様がいらっしゃるのかしら？」
「当然でしょ。見初められたらどうしよう！」
娘たちは華やいだ声を上げている。

東極一希の花嫁になれれば、窮屈な村から出ていける。彼女たちにとっては金糸が目の前に垂らされているも同然だ。

そんな娘たちに、美緒子は咎めるように言った。

「あら、東極一希様に選ばれるのはあたしよ。あたしが一番霊力が高くて、美人なんだから。それに巫女一族である和倉家の息女なのだし。あんたたちは巫女の家系じゃないでしょう？」

お喋りを邪魔された娘たちは、引きつった笑みを浮かべた。

確かに美緒子の顔立ちは美しいし、舞も上手いが、霊力がそれほど高いかというと疑問が残る。村では巫女の霊力を神主が優良・中・下という三段階で判定するのだが、具体的に数値化はできないので、どの程度の差があるのかは不明だ。美緒子は優良と判定されたそうだが、ほかにも優良の娘はいた。もちろん巫女候補でもない無が判定されたことはない。

ただ、田舎の村ゆえ、実際に霊力を使用してあやかし退治をしたことがある巫女はいない。巫女は霊力が高いほうがよいというのは、村の娘たちにとっては試験の判定に使う材料でしかなかった。

「だってさ、和倉家といっても、美緒子は後妻の連れ子なんじゃ……」

「有名な巫女だったのは先妻なんでしょ？　後ろにいる、あの仮面の……」

彼女たちは美緒子の後ろにいる無に目を向けた。

本来ならば、無のほうが和倉家の息女として堂々としていられるのではという見解に、美緒子は眦（まなじり）を吊り上げる。

「これはうちの下女よ。呪いのせいで顔が醜いから仮面をつけさせているの。巫女になんかなれないわ」

さっと視線を外した娘たちは稽古場に入っていった。

無のことは、呪いのため黒い仮面をつけているという噂が広まっているので、誰もかかわり合いにならない。彼女たちと無が話したことはないし、誰も味方になってはくれない。

美緒子は無が持っていた風呂敷包みを乱暴に奪うと、憎々しげに睨みつける。

「おまえがいると縁起が悪いわ。その気味の悪い仮面をみんなに見せないで」

「すみません、お姉様」

「お姉様なんて呼ばないでちょうだい！　おまえは下女だって言ってるでしょ」

「はい、お嬢様」

ぷいと顔を背けた美緒子は稽古場へ駆けていく。

仮面をつけているのはカノエの指示なのだが、この黒い仮面によりみんなから疎まれているのも事実だった。
真っ黒に塗り潰された仮面は人間の顔ではなく、まるで異形の怪物のようだ。
無としても、不気味な仮面を人前にさらしたくはないのだけれど、カノエと美緒子の荷物持ちとして出かけることも多いので、必然的に人目に触れてしまう。
仮面を外せたらいいのに……
呪われている、顔が醜い、火傷の痕がある。
どれも村人から囁かれている噂話だが、嘘だと言えないのがつらい。
あながち間違ってはいないからだ。
肩を落とした無は、とぼとぼと稽古場の裏手へ回る。
村の中をひとりで歩いていると、石をぶつけられることがあるので、できるだけ人目につかないようにしている。
稽古場からは流麗な音楽が流れてきた。
巫女神楽のための曲だ。
あの曲で舞うことができたら、どんなに素敵だろう。
裏手の小さな格子窓から、そっと室内を覗く。

稽古場では、巫女候補の娘たちが扇を手にして踊っていた。
こうしていつも見ているので、自然と舞の所作を覚えるようになった。
舞い踊る彼女たちからかすかに霊気が発せられているのを、無は感じ取る。
あの霊力をもって、退魔師の力を増幅させるらしい。
だが多くの巫女候補たちは、いずれ村の巫女になって神事を務めるため、退魔師と組む機会はほぼない。母は稀代の巫女と謳われていたそうだが、父も亡くなった今では、どのような活躍をしたのか知るよしもなかった。
つと、懐から桧扇を取り出して、それをじっと眺めた。
母の形見の桧扇には、華麗な花模様が描かれている。飾紐はもう色褪せていたけれど、母が残してくれた大切なものだ。
自分も舞ってみたいという気持ちが湧く。
桧扇を掲げようとしたけれど、すぐ近くを村人が通りかかる足音がして、慌てて木陰に身を隠す。
懐に桧扇をしまった無は、村人がいなくなるのを息を殺して待った。
「東極様が今夜、村長の屋敷を訪れるらしいな」
「ああ。だが酒宴を断られたとかで、村長は困っていたよ。軍神と言われるだけあって、

なんだか気難しい御方みたいだな」
話していた村人たちは無に気づくことなく、去っていった。
東極一希は、軍神という異名がついているほど強いのだ。
いったい、どんな人なのだろう。
無は村から一度も出たことがないし、退魔師がどのようにあやかしと戦っているのかも知らない。見たことがあるのは小さな動物のあやかしくらいだ。この村に住む娘たちのほとんどがそうだろう。
東極家の花嫁に自分が選ばれるわけはないし、すべて無とは別の世界の話だ。
涼やかな音楽を耳にしながら、きつく着物の合わせを握りしめる。
今の無にとって、母の形見の桧扇だけが生きるよすがだった。

美緒子の稽古が終わり、待っていた無は再び荷物を抱えて和倉家へ戻ってきた。
屋敷の仕事はまだ終わっていないので、引き続き部屋の掃除を行う。ほかにも、ごみを片付けたり、水汲みや薪割りをしたりなど、やることはたくさんあった。
いつもはカノエがやってきて小言をぶつけてくるのだが、今日はなぜか来なかった。
美緒子もその後は桶をひっくり返すような意地悪をすることなく、姿を見なかった。

きっと、数日後に迫った奉納の儀の準備で忙しいのだろう。
無は黙々と仕事に取り組んだ。
やがて日が沈み、夕食の後片付けを終えると、ようやく無は解放される。
体に凝った疲れを出し切るかのように長く細い息をついて、小屋へ向かった。
離れにある小屋は、もとは農具を入れておくための粗末なものだ。
埃っぽい土間と剥げた畳が数枚しかないところに、薄汚れた布団を敷いている。ほかには古い箪笥がもとから置いてあったので、そこに古着の着物をしまっていた。それから母の形見の桧扇も、掃除などをしているときに落とさないよう、箪笥に入れている。
疲弊した体を引きずり、小屋の戸を開ける。
こんなときは桧扇を持って湖畔へ行き、舞を練習したいが、どうしようか。
そう思っていたとき、目に飛び込んだものにはっとなる。
「……えっ⁉」
無残に破壊された木のくずが、土間に投げ捨てられている。
踏みにじったのか、土だらけだった。木の破片に見覚えのある花模様を見つけて、息を呑む。慌てて屈み、粉々になったものを手にした。
間違いなく、母の形見の桧扇だった。

昼間、美緒子の荷物持ちで稽古場へ行ったときは懐に入れていたのだが、帰ってきてから仕事があったので、一旦小屋へ戻り、箪笥にしまっていた。
いつもそうしているし、この小屋には誰も来ないので、今までこんなことはなかった。
「そんな……お母さんの形見なのに……どうしよう……」
無の両目から涙がこぼれる。
仮面の中に溜まった雫は顎の隙間から溢れて、ぽたぽたと土間を濡らした。
大切にしていた桧扇だったのに、どうしてこんなことになってしまったのか。
粉砕に等しい割れ方なので、修復するのは困難と思えた。
ぐすぐすと鼻を啜りながら、壊れた桧扇の破片をひとつひとつ拾い集めてハンカチに包む。
ふと、その中に小さな金具が紛れ込んでいるのに気づく。
「これは……？」
指先で摘んでみると、それは金具がついた赤いガラス玉だった。
美緒子のリボンの結び目を飾っていたガラス玉と同じものに見える。今日の稽古に行くとき、この赤いガラス玉が揺れていたのを覚えていた。
まさか……という思いが湧き、無は背筋を震わせる。

美緒子がここへやってきて、わざと桧扇を壊したのだろうか。
でも、どうしてそんなことをする必要があるのか。目についたわけではなく、箪笥にしまってあるものをあえて取り出すなんて、よほどの悪意がなければやらない。
たまらなくなった無は、桧扇を包んだハンカチを持って小屋を出た。
敷地の外れから、主屋へ向かって走る。
明かりのついた主屋の一角に美緒子の部屋があるので、無はそこへ回った。
「あの……お嬢様」
おずおずと声をかけるが、返事はない。
明かりが点いているので起きているはず。
無は窓辺へ近づいた。
すると、がらりと窓が開く。その途端、ばしゃりと水をかけられた。
「あっ……！」
咄嗟に目をつむったが、胸元が水浸しになる。
空の湯呑みを持った美緒子は、怒った顔をしていた。
「なにをしているの！　勝手に部屋を覗くなんて不躾ね！」
「す、すみませんでした。……あの、私の桧扇が壊されていたのですが、なにか知りま

せんか？」
ハンカチを開いて、壊れた桧扇を見せる。
冷たい目でそれを一瞥した美緒子は、意地悪そうに口端を引き上げた。
「あら、可哀想。どうして壊れたのかしらね」
「私が小屋に戻ってきたら、こうなっていたんです。稽古場から帰ってきたとき、箪笥にしまっておいたのですが……」
「じゃあ、泥棒かしら？　恐いわ」
あくまでもしらを切る美緒子に、桧扇とともにあったガラス玉を摘んで見せる。
「このガラス玉は、お嬢様のリボンについていたものではありませんか？　桧扇と一緒に落ちていました」
目を見開いた美緒子は、頭の後ろに手をやる。
そこにあるはずのガラス玉が取れていた。
やはり――と思ったら、美緒子は激高する。
「あたしがやったとでも言うの⁉」
「いえ、そうは言ってませんが……」
「おまえがあたしのリボンを盗んだのね？　あたしのせいにするつもりでしょう！　な

んて卑しい下女なの⁉」
声高に捲し立てる美緒子は空の湯呑みを投げつけてきた。
突然癇癪を爆発させたので、恐ろしくなった無は口を閉ざす。
そのとき、騒ぎを聞きつけたカノエが部屋にやってきた。
「まあまあ、なんですか。どうしたの、美緒子？」
「お母様！　この下女が、あたしのガラス玉を盗んだのよ。しかも桧扇が壊れたのを、あたしのせいにするの」
ギッと、こちらを睨んだカノエは鋭い声を出す。
「おまえが舞にしがみついているものだから、罰が当たったのよ。これからは心を入れ替えなさい。誰のおかげで生きながらえているのか、よく考えるのね」
「……えっ」
無は仮面の奥にある目を瞬かせた。
カノエは部屋にやってきたばかりなのに、すでに事情を知っているかのような口ぶりだ。それに、桧扇が壊れたのは罰が当たったせいだなんて、そんなことがあるのだろうか。神罰などではなく、何者かが故意に破壊したのは明らかである。
もしかして、カノエが桧扇を破壊するよう指示したのだろうか。

確かに、早朝から舞を練習していたため、朝食の支度が遅れたばかりだった。
その罰ということなのか。
「でも……」
遅れはしたものの、無が家事をしなかったことは一度もない。
そう言いかけたけれど、折檻が怖いので口を噤む。
眉をひそめたカノエは虫を追い払うように手を振った。
そして美緒子に向き直ると、無へ対するのとは真逆に笑みを浮かべる。
「落胆することはなくてよ、美緒子。新しいリボンを買ってあげますからね」
「いらないわ、お母様。東極家の花嫁に選ばれたら、そんなものいくらでも買えるもの」
「あらそうねえ。扇がなければ、この下女が選ばれるなんてことありえませんからね。あなたこそ和倉家の娘なのだから、確実に花嫁になれるわ」
高笑いするふたりを、無は絶望しながら見つめた。
母の形見を壊したのは、無が奉納の儀に出られないようにするためなのだ。
もとより師範のもとで稽古すらしていないので、儀式に出られる資格がない。
だが村の娘たちが言ったとおり、もとは和倉家の娘は無なので、あらためてそのことに気づいた母子は形見の品を壊したのだろう。

手ぶらで舞うなど、ありえない。
桧扇がなければ、無が稀代の巫女と謳われた母の子だと証明するものがなくなる。
未来どころか、過去の大切な思い出までも粉砕され、無は絶望の淵に落ちた。
ごめんなさい……お母さん……
無には死んだ母に心の中で謝ることしかできなかった。
この家ではいつでも母子が正しく、悪いのは無なのである。言い返せば折檻されるし、食事を抜かれる。継母に逆らえば、無は生きていけない。ここは無の家だったはずなのに、今ではカノエと美緒子が支配しているのだ。
そうなってしまったのも、無が無価値だからなのか。
せめて、母の形見だけは失いたくなかった。
肩を落とした無はハンカチを胸に抱きしめ、主屋を去った。

小屋に戻る気になれず、無は湖のほとりにやってきた。
辺りには民家がないので、明かりひとつない。幸いにも今宵は満月のため、煌々とした月明かりが湖面を照らしていた。
走ってきた無は、呼吸を落ち着ける。

壊れた桧扇ごと丸めたハンカチを懐にしまう。たまらなくなり、仮面を外した。
ひんやりした外気が顔に触れると、それだけで堰を切ったように涙が溢れてきた。
「うぅ……」
ぽろぽろと、止めどなく涙がこぼれていく。
透明な雫は月夜に光り輝いた。
身を屈めた無は、湖に自分の顔を映す。
栄養が取れていないため、貧相な顔と体つきだった。長い黒髪はほつれている。
乾いた唇を開けて、舌を出した。
無が、呪われた娘と言われるゆえんがそこにある。
舌の広い面には、精緻な紋様が描かれていた。
藍色の紋様は幾重にも円が重なり、その周りをぐるりと文字のようなものが取り囲んでいる。複雑な紋様はなにかの暗号にも見える。まるで刺青のようだが、このしるしは無が生まれたときからあった。
両親は呪いなどとは言わなかったのだが、村人は気味悪がっていた。
『お父さん、私の舌が変だって村の人が言うの。これ、なんなの？』
『いずれ紋様の意味を教えよう。これは素晴らしいものなんだよ』

そのような会話を父と交わしたが、結局紋様について詳しく教えてもらえる機会がないまま、父は亡くなってしまった。
無の両親が亡くなったのは、呪いのせいだと言い出したのはカノエだった。それから、呪いを封じるためと言われて、仮面をつけさせられるようになったのだ。
紋様は素晴らしいものだと父は言ったが、それは無を慰めるための嘘だったのかもしれない。この奇怪な紋様が無を救ってくれたことなどないからだ。
呪いというのは本当かもしれない。
「これさえなければ、お父さんとお母さんは死なずに済んだのでしょうか……」
何度も取ってしまおうと考えたが、紋様は舌の広い面に描かれている。舌ごと切り取るわけにもいかず、もちろん擦っても落ちなかった。
口を閉じた無は、湖面から顔を背ける。
悩んでも仕方がなかった。悲しいことばかりの人生なので、振り返るほどに落ち込んでしまう。
懐からハンカチを取り出して中身を広げる。桧扇の柄を見つけ出し、指先で摘んだ。
もはや扇には見えないけれど、無はそれを月光に捧げる。
心がざわめいているときは、舞を踊ると凪ぐ。

楚々として、足を踏み出す。
伸びやかに腕を掲げ、蝶が羽を広げるように。
気持ちを込めて舞い、月に祈りを捧げた。
だが、くるりと回転したとき、摘んでいた柄を取り落としてしまう。
「あっ……」
ふっと、集中が途切れた。
あまりにも柄が小さいため、落としてしまった。
大切な母の形見なのに。
地面を這った無は、必死に落とした柄を探す。
ようやく見つけて、ほっとしたとき――
「なぜ、壊れた扇を使っているんだ？」
深みのある声をかけられて、はっとした無は顔を上げる。
声のしたほうに目を向けると、大樹にもたれた男性がこちらを見ていた。
濡れ羽のごとき黒髪が、月光に撥ねている。黒鳶色の双眸は澄み渡り、まっすぐな鼻梁と薄いけれど形のよい唇が端麗な容貌に華を添えていた。
鍛えているとわかる体躯のよい体に漆黒の軍装をまとい、帯刀している。

村人ではありえなかった。
彼がいつからいたのか、まったく気づかなかった。
うろたえた無は、思わず手にしていた柄を懐に隠す。
「あ、あなたはいったい……どうしてここにいるんですか？」
「月が綺麗だからだな」
男性は満月を見上げた。
眩い月光が彼の精悍な面立ちに濃い陰影を形作る。
「月を眺めるために散歩していたら、泣いている少女に出会った。それだけだ」
「えっ……」
泣いていたのは、無がここへやってきて、仮面を外したときである。
まさか最初から、彼はそこで見ていたのか。
「あの、それでは、私がひとりごとをつぶやいたり、舞を踊っているところを、ずっと見ていたのですか？」
「見ていた。どうにも気になってな」
男性は平淡に答えた。
誰もいないと思っていたので恥ずかしくなり、無は顔をうつむかせる。

ということは、彼は無が舌を出していたところも見ているのだ。
呪われた紋様を、こんなに綺麗な人に見られるなんて……
今の無は仮面をつけていない。
口を開いたら紋様が見えてしまうのではないか。そうしたら呪いがうつってしまうかもしれない。
咄嗟にてのひらで口元を覆うと、彼は薄い笑みを浮かべる。
「どうした？」
「……私の舌にある紋様のことは、黙っていてもらえますか？」
「隠したいのか。もしや仮面をつけているのは、舌を見せないようにするためなのか？」
「……呪われていますから。私の両親が亡くなったのは、この呪いのせいなんです」
無は小さな声でつぶやいた。
彼は嫌悪を見せないが、呪われた紋様が舌にあったら誰でも近づきたくないだろう。
ところが彼は、つと大樹から離れた。
長い脚で歩を進めると、すぐに無のそばにやってくる。
どきんとした無は硬直した。
彼が刀を帯びているというのもある。帝都の警察や軍部の人間でなければ、帯刀は許

可されていない。
しかしそれ以上に、月明かりに照らされた彼の容貌の美しさに畏怖を感じた。
まるで鬼神のごとく雄々しく、それでいて涼やかさを帯びている。
手を伸ばせば触れられるかどうかくらいの距離で、彼は立ち止まる。
戸惑った無が背の高い男性を見上げると、なぜか彼は身を屈め、顔を近づけてきた。
「あ、あの……？」
「呪いというのは、これのことか？」
ためらいもなく口を開けて自らの舌を出した男性に、無は瞠目する。
彼の舌には、藍色の紋様が刻まれていた。
しかも、無のものと同じ紋様だ。こんなにも精緻なものが、偶然できたとは思えない。
自分と同じ紋様を持つ人がいるということを知り、驚愕に包まれる。
「えっ⁉　私のと同じ……ど、どうして？」
舌をしまい、背筋を正した男性は、真摯な双眸を向けた。
「これは、呪紋（じゅもん）という。秘められた霊力を最大限に発揮するために用いられる、いわば鍵のようなものだ」
――呪紋（じゅもん）。

その響きは忌まわしいものであるはずなのに、なぜか無には輝いて聞こえた。低いけれど深みのある彼の声が、そんなふうに感じさせたのかもしれない。
「特定の人間しか持たない、生まれつきのものだ。決して他者を呪い殺すような効力はない。むしろ呪紋(じゅもん)があるのを誇らしく思っていいぞ」
「そんなこと言われても……この呪紋(じゅもん)という紋様がなにかの役に立ったことなんてありません。すごい霊力が発揮されるなんてこと、一度もありませんでした」
「使用するには、コツがいるからな。持っているだけでは役に立たないのは俺も同じだ」
「……そうなんですか」
一流の退魔師や巫女のように、鍛えないと使えないのだろうか。
けれど無は稽古にすら通えないのだから、巫女として大成するなんて、あるわけがない。
つまり、どれだけこの呪紋(じゅもん)が素晴らしいものであっても、宝の持ち腐れということだ。
肩を落としていると、彼は腰のベルトに提げていた筒から、細いものを取り出した。
「受け取れ」
すい、と差し出されたのは、桧扇(ひおうぎ)だった。
思わず受け取った無は、ぱらりと桧扇(ひおうぎ)を広げる。
そこには真紅の鳳凰と青い龍が描かれていた。

一目見て、高価な代物とわかる。飾紐はついていない。かなりの年代物のようだ。
「……これは？」
「奉納の儀に出るんだろう？　この扇を使え」
「いいえ、それに、これはとても高価なものではありませんか？　お借りできません」
奉納の儀に出る予定はないし、練習するだけだとしても借りるなんてできない。
扇を畳んだ無が返そうとすると、彼は軽く手を上げて制する。
「おまえの舞を見たいんだ。それを使って最後まで見せてくれ。その出来によって、貸すかどうか決めよう」
「……わかりました」
ひとまず、彼に舞を見てもらうことになった。
誰かに審査されるなんて、無の人生で初めてのことなので緊張する。
だが、この桧扇(ひおうぎ)を使わせてもらうのは、これが最初で最後かもしれない。この桧扇(ひおうぎ)にはずっと手にしていたい抗えない魅力のようなものを感じた。そう思うと断りたくなかった。それに、なぜか彼に自分の舞を見てほしくなったのだ。
「――それでは」
「ああ。頼む」

そう言うと、彼は大樹のそばに戻り、そこに佇む。
黒鳶色の双眸が射貫くようにこちらを見ている。
ごくりと唾を呑み込んだ無は、跪いてから一礼した。
すっと立ち上がり、桧扇を掲げて月光にさらす。
静かに足を踏み出し、優美に腕を上げる。ひとつひとつの動作をするたびに、降り注ぐ月の光の中で、手にした桧扇から蝶の鱗粉のごとき輝きが散った。
無の体から凄まじい霊気が立ち上る。辺りは神聖な気配に満ちた。
やがて桧扇を下げた無は跪く。
一礼をして終えると、ふうと息をついた。
今までで、もっとも集中できた。
桧扇がしっくりと手に馴染んだのだ。途中からは見られていることさえ忘れていた。
初めて手にしたもののはずなのに、なぜだろう。
丁寧に扇を畳んだ無は、大樹のそばにいる男性に目を向ける。
双眸を細めた彼が訊ねた。
「おまえ、本当になんともないか？」
「え？　なにがでしょう」

意味がわからず、無は目を瞬かせる。
男性は軽く首を横に振った。
そのなんでもない仕草にも、洗練された貴族のような気品が滲む。
「いや、いい。やはりおまえには資格があるということだ」
「はあ……」
「その桧扇を持っていろ。おまえを守ってくれるだろう」
そう言って背を向けた彼は、大股で去っていく。
桧扇を預けられてしまった無は、広い背に声をかけた。
「あ、あの！」
軍装が暗闇に紛れる刹那、振り向くことなく、彼は手を上げた。
袖口の銀糸が、きらりと月明かりに輝く。
それきり、闇に呑まれたかのごとく彼の姿は見えなくなった。
湖畔に風が吹き抜ける。
無は桧扇を手にしたまま、呆然としていた。
「お名前を聞けばよかった……」
彼の名前すら知らないのに、桧扇を借りてよかったのだろうか。

それに、この桧扇は男性の私物だと思われるが、どうして持っていたのだろう。巫女は女性のみで、男性が舞の道具は使わないはずだ。
月明かりの下で、桧扇は柄に光を受けて輝いている。
まるで、無を慰めるかのように。
満月が大きく傾いても、無はそこに佇んでいた。

数日が経ち、奉納の儀が行われる当日になった。
無は早朝から忙しく働いていた。
朝食が終わると急いで片付け、美緒子の支度を手伝う。
用意してある上等の着物を着付けると、次は化粧と髪結いだ。
鏡台の前に座った美緒子は、にこやかに微笑んでいた。
カノエが巫女用の化粧を施している間、無が長い髪を梳く。
上機嫌のカノエは、美緒子の紅を筆で引きながら褒めそやした。
「なんて美しいんでしょう。東極様が、あなたの美しさに一目惚れするのは間違いないわ」
もはや美緒子が花嫁に選ばれるのは決まっているような物言いだ。
無は忙しくて、相づちを打つ暇もない。

舞を踊るときは巫女装束なのだが、神社までは着物で出かけ、髪型も変えると美緒子が言い張ったので、両方の衣装や道具を用意する必要があった。それらはすべて無の仕事である。美緒子はただ美しく着飾られていく自分の姿を鏡で眺めているだけだ。
ようやく完成すると、巫女装束や道具などをまとめた風呂敷を無が背負う。
カノエは険しい眼差しで言いつけた。
「決して落とすんじゃありませんよ。おまえの命より、その巫女装束は価値が重いんですからね」
「はい、奥様」
「それから、神社で美緒子の支度が終わったら、おまえは人前に姿を現すんじゃないわよ。黒い仮面の下女がいるなんて東極様に知られたら、不吉だと思われますからね」
「わかりました」
それならば仮面を外せばよいのではと思うものの、カノエの意見に反することは許されない。無はいつものように、命令に従うだけだ。豪奢な着物をまとった美緒子とカノエの後ろから、荷物を背負った無は黙してついていく。
屋敷を出て道を歩いていくと、村人たちが続々と神社へ向かっていた。
東極家が花嫁選びに訪れるなど、村にとって一大事だ。地位の高い巫女になれたなら、

村も有名になって潤うかもしれない。それに村娘が出世する絶好の機会だ。
ほかの巫女候補たちはすでに儀式用の髪に結い上げている。巫女装束を着ている娘は、外套を羽織っていた。
娘たちは緊張しているためか、誰も挨拶を交わさない。
美緒子も、つんとしていた。
花嫁に選ばれるのは、当然ひとりだけだ。誰もが自分こそがと思っているのだから、ほかの巫女候補は敵みたいなものなのだろう。
彼女たちとともに、村の中心部にある神社に辿り着く。
石段を上ると、雄壮な本殿が現れた。趣のある本殿の前に舞台が設置されている。ここで巫女神楽を披露するのだ。
舞台の周囲にはすでに村人が集まっている。上座にひとつだけ椅子が置かれ、その周りに役人が待機していた。どうやらあの席が、東極一希という人物が座るところのようだ。
それらしき人はいないので、まだ来ていないのかもしれない。
巫女候補たちは本殿の隣にある社務所へ向かった。社務所の中に控え室が用意されている。無もカノエと美緒子のあとに続き、社務所の控え室へ入った。
そこにはすでに多数の巫女候補がおり、それぞれ支度をしていた。さほど広くない部

屋なので、かなり窮屈だ。
不機嫌になった美緒子は声を尖らせる。
「どうしてこんなに混んでいるのよ。どうせあたしが選ばれるんだから、ほかの巫女候補なんていなくていいのに」
周りに聞こえるように言うので、近くにいた娘がちらとこちらを見る。
無は恥ずかしくなり、仮面をうつむかせた。
隣にいたカノエが笑みを浮かべて、美緒子を宥める。
「美緒子が選ばれるのは間違いないけれど、引き立て役が必要ですからね。さあ、こちらで着替えなさい」
一角を陣取ったカノエは、顎で無に指示を出す。
慌てて荷物を下ろした無は、風呂敷包みの中から小型の鏡台を取り出した。
巫女装束のほかにも櫛や化粧直しの道具など、小間物が多くある。
それらを無が用意していると、美緒子が両腕を水平に伸ばした。
彼女の着付けはすべて無がやるので、美緒子自身はなにもしない。
「お母様、もしほかの娘が選ばれたらどうするの？　本当に大丈夫よね？」
「心配いりませんよ。あなたが一番美しいし、家柄も充分だけれど、念には念を入れま

すからね」
「そう。それならいいけど」
カノエがなにをするつもりなのかは知らないが、無は手早く美緒子の帯締めを外して、帯を解いた。
機嫌を直したらしい美緒子は、白衣を広げて忙しなく立ち回る無に言いつける。
「いいこと？　あんたは下女よ。あたしが花嫁になっても、余計なことを言うんじゃないわよ」
「わかりました」
巫女装束は白衣と緋袴の上から、千早をまとう。
結い上げた髪に、前天冠を被れば完成だ。
最後に桧扇を手にした美緒子は、鏡に映る自分の姿に満悦していた。無は脱がせた着物を片付けるのに忙しい。
娘たちは全員が同じ巫女装束を着ている。彼女たちはそれぞれが手にした桧扇をかざし、振りを練習していた。
そのとき、控え室に役人がやってきた。
「準備は整いましたでしょうか。巫女候補の方々は、舞台袖にお越しください」

そろそろ奉納の儀が始まる時刻だ。
呼び出されたので、巫女候補たちは次々に控え室を出ていく。
美緒子を先に行かせたカノエは、役人の男性に分厚い包みを差し出した。
「どうぞ、お納めくださいな」
「なんでしょう？」
「和倉美緒子でございます。由緒ある和倉家の娘でして、美しく器量もよいのです」
ああ、という顔をした男性は眉根を寄せた。彼は包みを受け取ろうとしない。
「困ります。花嫁を選ぶのは東極様ですので、わたしどもに権限はありません」
「そこをなんとか。東極様が迷われているときに助言の機会もありましょう。名誉ある帝都のお役人ですもの」
なおもカノエは包みを押しつける。
どうやら中身は札束らしい。
確実に美緒子が選ばれるために念を入れるとは、こういうことだったのだ。
だが役人は首を横に振った。
「受け取れません。今までにも袖の下を使おうとした方がいましたが、受け取った役人は東極様から咎められて辞職しております。東極様はこういったことが大変お嫌いです」

逆に不利になってしまうと察したカノエは、唇を歪めると包みを袂に入れた。
東極一希は不正を許さない人柄らしい。
それとともに、これまでほかの村で行われた儀式でも、花嫁に望まれる娘はいなかったのだとわかった。
袖の下を受け取らない役人に用はないのか、カノエはさっさと控え室を出ていく。
室内には無だけがぽつんと残された。
黒い仮面をつけた少女に、役人は小首を傾げる。
「きみは？　巫女候補の親族かな」
「あ、あの……」
無も和倉家の娘なのだが、美緒子から下女だと念を押されている。
村人は和倉家の事情を知っているが、彼は帝都の役人なので、無の仮面を見て不思議に思ったのだろう。
どう答えたらよいのか戸惑っていると、彼は無を促した。
「儀式の最中はここは閉めるから、舞台のそばで見学してください」
「は、はい。わかりました」
すぐに無は控え室から出た。

役人が控え室に鍵をかける音が背後で聞こえた。防犯のためだろう。
室内にはいられないので、外で待っているしかない。帰りも美緒子の着替えを手伝わなければならないため、遠くへは行けなかった。
カノエから人前に姿を現すなと言いつけられているが、人混みに紛れていれば問題ないだろう。もとより村人は無の仮面を見慣れている。今さら驚く人はいない。
社務所の外に出ると、境内は人だかりができていた。
先ほどよりさらに混雑している。
村人たちは期待に目を輝かせて舞台を見つめている。
ちょうど儀式が始められたばかりらしく、宮司が祝詞を奏上していた。
無は人垣の端にいるので、舞台はちらりとしか見えない。
そのとき、上座の椅子に座っている男性の姿が見えた。
「えっ……!?」
思わず無は驚きの声を上げる。
濡れ羽のごとき漆黒の髪に射貫くような鋭い黒鳶色の双眸。端麗な顔立ちと体躯のよい体を黒の軍装に包んでいる。軍服には見覚えのある銀色の刺繍が施されていた。
間違いない。彼は夜の湖畔で出会った男性だ。

まさか、あの人が――？
無のそばにいた村人が囁く。
「あの方が東極一希様か。軍神と呼ばれるだけあって怖そうな人だな」
「一流の退魔師だからな。うちの村から花嫁が選ばれたら、すごいことだぞ」
あの男性が、東極一希だったのだ。
名前を聞かなかったけれど、まさかそうとは思わなかった。
それじゃあ、この桧扇は……東極一希様のもの。
ぎゅっと、無は胸元を握りしめる。
借りた桧扇はあの夜からずっと懐に入れたままにしていた。もしも美緒子に見つかったらまた壊されかねない。借り物なので、それは避けたかった。
まさか男性の正体が東極一希で、あんなにも雲の上の人だったなんて知らなかった。
どうやってこの桧扇を返したらよいのだろう。
困惑していると、祝詞が終わる。
礼をして下がった宮司の代わりに、東極一希が立ち上がった。
勇猛な立ち姿は威厳に満ちている。
彼の鋭い眦は畏怖を与え、しんと場が静まり返った。

立ち読みサンプル
はここまで

獅子が狩りの体勢に入ったかのような威圧を感じ、人々は息を呑む。
「これより、巫女神楽を審査する。選ばれた者は東極家の花嫁となり、姫巫女の栄誉が与えられる」
境内にどよめきが起こる。
東極家の花嫁だけでなく、姫巫女の地位も同時に与えるというのだ。
姫巫女とは巫女の中でも最高峰の地位である。軍部でも特別な階級となり、高い権威を持つと伝えられている。
無はそれを、噂話をしている巫女候補から耳にした。
――姫巫女になれば、東極一希様のおそばにいられるのですね……
無の母は稀代の巫女と謳われたそうだが、姫巫女ではない。姫巫女は別世界の存在なのだ。四神一族である東極一希に選ばれたら、それほどの地位が与えられるのは当然なのかもしれない。
一希が椅子に腰を下ろすと、いよいよ巫女神楽が始まった。
笙の音色が響き渡り、流麗な雅楽が奏でられ、舞台の端から巫女装束をまとった候補たちが列になって出てきた。
その中には美緒子がいる。